

朱 晦 菴 と 王 陽 明

宇 野 哲 人

居敬窮理を説ける朱子と、致良知を主張せる陽明との相違は、極めて明瞭にして、何人も異論なき所なり。よしや王子の朱子晩年定論の著述ありと雖も、到底兩者の相違を歸一すべからざるは、蓋學界の定論なり。兩者の得失に就ての論争は、多くの儒先の所説既に備はり、更に後世少子の喙を容る、餘地なし。

惟ふに朱子は宋高宗の建炎四年(西曆紀元一七九〇)に生れ、寧宗の慶元四年(一八六〇)に卒す。曠世の大儒にして門下に多數の俊秀あり。元より明に至るまで、朱子學は一世を風靡す。明初勅撰の四書五經大全を讀めば、思半はに過ぐべし。陽明は即ち朱子學萬能の時代に生る。時に明憲宗の成化八年(西曆二一三二)朱子に後ること實に三百四十二年なり。傳へ言ふ陽明は年十九才の時、婁一齋より、宋儒の所説は人皆學んで聖人たるべしといふに在るを聞き、始めて希聖の學に志すに至れりと。陽明が友人を約して、庭前の竹の青青たる所以を研究せんとして、徹宵思ひを潛めしは、即ち朱子窮理の説を實行せしなり。既にして事物の理を研究するが如きは、希望の學に何等の關係あること無きを曉り、百方苦慮遂に致良知を創唱し、彼の學説はここに決定す。

朱子の窮理説は、大學の格物致知に本づくこと勿論なり。陽明既に窮理を非とするが故に、朱子の八條目説を棄て、誠意を以て大學の鬼門關とし、朱子が物をあらゆる事物とするを排し、意の所在を物とす。例へば意、君親に事ふるに在れば、君親に事ふること即ち物なりとし、格を窮格と解する朱子の説を排し、格は正なりといひ、君親に事へて誠を盡せば、之を格物といふ。如何に君親に事ふべきかを知り、完全に奉仕を實行すれば、之を致知といふ。故に陽明に従へば、凡そ意の所在の物を完全に處理すれば、是は同時に格物といひ致知といひ誠意といふべし、故に陽明

は八條目を廢して六條目をなすなり。

陽明は宋儒と同じく靜坐の有功なることを認むれども、靜坐は小學放心を收むるの一助と爲すに過ぎず、寧ろ事上磨鍊を第一義となせり。事上磨鍊の一例は傳習録中劉澄の所記あり。劉の郷里より急使至り長子の急患を傳ふ。劉、苦心焦慮舉止宜を失し殆ど手足の措く所を知らず、王子之を觀て曰く、子の病を憂ふる親の至情は、固より天理なり。然れども度を過ぎ節を失ふべからず、今こそ事上磨鍊の好機會なりと。劉澄反省する所あり。後日復使者あり長子の病少瘥す。事上磨鍊は必ずしも病のみに非ざるは勿論なり。王子が格物即誠意と大學の鬼門關とする以上、事上磨鍊を重視するは當然といふべし。

朱子が致知格物を重視したる點は、陽明と全く相違すること勿論なり。然れども居敬の點に於て、敬を主一無適と解し、その實際著手の點に於て、靜坐を獎勵したることは、宋一代に共通する修養法なり。然るに明窓淨机の下、端坐澄心すれば、如何にも清淨潔白物外に超然たる想を抱くが如くなれども、復た世間に出て、利害關係錯綜し毀譽褒貶亂れ飛ぶの地に入れば、復名利の奴たるを免れず。朱子は如是を名づけて死敬といひ、眞の敬は活敬ならざる可からずと云ふ。活敬とは世上波瀾万丈の間に立つて、主一無適の精神状態を失はざるを云ふ。換言すれば活敬こそ實事に處して精神を鍛鍊するもの、實に陽明の事上磨鍊を酷似す。なほ陽明が氣習の蒙蔽を説くが如きは、朱子の氣質變化説を繼紹せるもの、今一一之に論及せず。

要するに朱王二子希聖の學は全く相違すること勿論なれども、實際著手の點に於ては、遂に其軌を同じうすといふべきなり。